

# 九州朝陽会報

平成二三年三月一日発行第十四号

## 鹿児島新幹線全通と

### 新博多駅開業によせて

九州旅客鉄道(株)元社長・会長

石井幸孝(新3)

平成二三年三月一二日に九州新幹線鹿児島ルート博多新八代間が開通する。これで九州を縦断する新幹線が全通して、南北の時間距離が半分以下となり、九州内でもいろいろな変化が起こりそうである。ところで「ローマは一日にしてならず」というが、鹿児島新幹線のことの起りも古い。

昭和三九年に開通した東海道新幹線が予想を上回る好成績で高く評価されたのを、受けて、全国に新幹線を建設整備しようという空気になってきた。昭和四五年に「全国新幹線鉄道整備法」ができ、鹿児島新幹線の計画が浮上したのは田中角栄首相の「列島改造論」の頃だ。ところが土地の買占め



でインフレが起こったり、昭和四八年にはオイルショックで、紙上プランは進んでも工事のほうは一向に進まなかった。昭和五七年には第二臨調が「国鉄分割民営化」を答申し、新幹線計画はストップしてしまい昭和六二年四月一日の国鉄改革・JRの立ち上げに全力を傾注した。中央の政府・与党にも新幹線推進派と国鉄改革成功が先で新幹線慎重派との葛藤があった。



分割民営化されたJR内部においても、新幹線を既に持っていた本州三社は慎重派だった。JR九州は三島の中でも人口密度は大きいし、太平洋メガロポリスつまり東海道・山陽の西の拠点という自負もあり、高速道路が縦横十文字に完成する九州で、JR九州の経営上も新幹線は不可欠の思いは強く、その後も早期実現の立場を表明してきた。中央からは「九州に新幹線はいらない」JR本州三社の幹部からも牽制球が入る有様だった。東京に長年住んでいた者の実感としてわかるのは「東京の人は九州にこんな大都會があることを知らない」ということだった。

したのに、その先は大変遅れた苦い経験があり、博多熊本を先に始めると工事のしやすい八代で止まってしまうという恐れがあった。そのうちに建設要望と厳しい財政事情の折衷案として、予算を半分ぐらいにした暫定節減計画が運輸省から出てきた。これによれば八代西鹿児島は本格的な新幹線(フル規格)を造るが、博多八代は当面造らない。八代以南の新幹線は在来線並みの軌道(1067mm)として、博多から出発した従来の特急はそのまま走り、これをスーパー特急と称した。新幹線のレール幅は1435mmだから、これではとても200km/hもない。地方の政治家からは「ウナギ(フル規格)を注文したのにアナゴ(フル規格)を注文した」と不評だったが、この機を逸するといつ着工になるかわからないので、まあ出てきたものは頂いておこうとこの案をのんだ。しかし事態は一向に進まなかった。そうこうしているうちに、第三紫尾山トンネル(出水駅川内駅間9987m)は断層のある長トンネルなので、本工事前掘削が必要という理由をつけて、調査トンネル工事着工にこぎつけ、これを機会に「新幹線着工万歳！」と工事開始祝賀会を開いた。



が走ることになる。同時に博多駅ビルも建て替え、阪急デパートや東急ハンズといった九州初お目見えのキーテナントも入る。明治二二年の出来町時代の博多駅舎から数えて四代目である。

全国の新幹線列島大動脈という戦後の巨大投資を未来に向けてどう活用するか議論がこれを機会にいよいよ始まりそう。午前〇時から早朝六時まで新幹線は動いていない。ここに夜間コンテナ特急を走らせて活用しようという発想もあり、夜間余剰電力の活用で、物流の迅速化、道路渋滞対策、排気ガス抑制、新鮮食料輸送など、そのメリットも大きいというわけで今後の課題であ

た。次の仕事は博多八代間の工事開始と全線フル規格への格上げであった。この頃政権が目まぐるしく替わりいろいろ苦労を重ねたが、やがて全線フル規格実現を達成することができ、やっと「ウナギ」にありつけたというわけだ。平成一六年に新八代西鹿児島中央(元の西鹿児島)が開業、そしてこの度平成二三年三月一二日に新幹線鹿児島ルート全線開業、大阪、福岡、鹿児島間に直通新幹線

ろう。(掲載写真は筆者提供)

## 陶芸家への道

三名室<sup>①</sup>  
松形恭知(新21)



工房で製作中の筆者

陶芸への関心は新宿高校時代に始まります。美術好きだった私は、剣道部の稽古がない日に、近くの伊勢丹の美術画廊に行き、当時の前衛陶芸集団「走泥社」の作品をよく見ていました。今では各地の美術館に所蔵されている作品に心をときめかしたものです。

大学に進学後も、将来は陶芸家になりたいと各地に弟子入りのお願ひに行きました。陶芸で生計を立てる自信もなく断念しました。

教員にでもなれば、夏休みもあって陶芸などやる時間もあるのではとの不純な動機で中学の教師になりました。しかしそれはとんでもない誤解で、毎夜遅くまでの残業、休日なしの剣道部の指導に明けくれる毎日でした。それでも充実した教師生活を送るようになりました。

一度だけ剣道部のない学校に赴任し、初めて休日がとれるようになり、折しもそこが「荒れる中学校」で休日ぐらいいは気分転換をしな

ければと陶芸を再開するうちに、程なくあこがれの陶芸家が活躍する国展、日本陶芸展、益子陶芸展などに入選したり入賞できるようになりました。しかし次の異動先で再び剣道部顧問、また休日なしの生活になり、帰宅後十時頃からロク口を引く生活になりました。折しも体力的な問題や高齢の両親の世話もあり、教職三十年を機に埼玉での教職を早期退職し、平成十八年に両親の住む宮崎に陶芸工房を築くことを決めました。

そんな折、九州朝陽会設立の案内をいただき、九州に新宿高校の同窓会があることに驚くとともに、本籍地ではありますが生まれても育ってもない九州で孤軍奮闘していた私には、限らない心強さを感じました。私にとって三十年の回り道は大変貴重ではありますが、一方三十年の遅れでもあり陶芸で生計を立てることは簡単ではありません。

しかし新宿高校時代の剣道部顧問岡村忠典先生から「私が東京営業所長をやる」との有難いお言葉を頂くなど、多くの方が応援してください、おかげさまで少しずつ各地で展示会を開くことができるようになってきました。

この度新博多駅ビルオープンにあたり、阪急百貨店から声をかけていただき福岡で初めて展示会(後記)を開催することになりました。同窓生の皆様にも近くにお越しの折には御高覧いただけただけなら幸いです。

### 脚注①

哲学者の柳宗悦は、無名の職人が日常暮らしの中から生み出した日用雑器の中に、健やかな美しさがある。ことを見出し、民芸運動を展

開し、これに共鳴した濱田庄司、河井寛治郎、バーナード・リーチらは、自らの創作にこのような美を取り入れ清新な作品を作りだした。三名窯においても、先達に学び、現代の暮らしの中から生まれ、暮らしの伴侶として使ってもらえるような器を作ることを目指している。

### 脚注②

第二次大戦後の一九四八年京都で結成された前衛陶芸団体。八木一夫を中心に鈴木治山田光、叶哲夫、松井美介らが創立に参加



松形さんの作品

## 展示会のご案内

期間 平成二十三年三月三〇日

～四月五日

場所 阪急百貨店博多駅七階

展示 松形恭知(陶器) 川野恭和

(磁器)原清(木工)

## 忘年会開催記

九州朝陽会幹事長

小泉純理(新7)

平成二十二年の忘年会は新年会と同じ福岡市内六本松のもつ鍋「月川」で開催しました。

今年には熊本から初参加の野中道生さん(新37)と坂本辰哉さん(新19)をはじめ、はるばる広島から新規会員の佐治尚雄さん(新14)そして大分から川辺正行さん(新2)ら遠路からの参加者も多く総勢十四名の盛会となりました。三つのテーブルを囲み最年長の小代伸博さん(中21)による乾杯に始まり、この店独特のもつ鍋を肴にビール、焼酎と杯を重ねるうちに、それぞれの近況報告となりました。

なかでも印象に残ったのは、闘病報告の坂本さんが唯一人の喫煙者であったこと。大先輩の川辺さん、そして古希を過ぎてなお元氣な寺田さんが、ネンリンピックで活躍していること。他方最年少の白井康生さん(新47)が、勤務先のJR九州での春の新博多駅開業、鹿児島新幹線開通に向けて、張り切って日々業務に勤しんでいることなどでした。

尚、川辺さんがこの春に奥様の希望で、故郷東京に転居される由まことに残念です。予定の三時間もあつという間に過ぎ、この春の「花見の宴」(別途案内の通り)での再会を約束して散会となりました。

## 訃報

卒の7回総支配人の小坂弘治さん(元博多座)が、昨年9月末に突然胆嚢癌を患われていました。心よりご冥福をお祈りいたします。次号は小坂氏の追悼特集を考えています。

九州朝陽会事務局